
魔女の小さな森

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の小さな森

【Nコード】

N0728Z

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

森の中にある店には、変わり者の魔女が住んでいる。店で扱っているのも、役に立つ薬から得体のしれない品物まで様々。そこに住み込むことになった普通の女性と店主である魔女、そして、不思議な客たちとの、どこか日常から外れた物語。

1・あめ

その店は、村に近い森の中にあった。

比較的穏やかな獣や、大人しい魔獣しかいないため、子供たちの遊び場にもなっているその森に、いつ頃その店が出来たのかは、わからない。

村で一番の年寄りも、自分の祖母が生まれた時にはもうあったと言っ。

今の店主が村にやってきたのは20年も前のことだが、それまでは、違う女性が店にいた。

その女性以前は、若い夫婦だったらしいが、彼女らの代替わりがどうやって行われ、どういう理由があつて次の店主に選ばれるのかも、誰も知らない。

ただ、扱うものはいつも同じで、役に立つ薬草から、得体の知れない薬や物まで様々で、必ず店主は魔女なのである。それだけは、ずっと変わらない。

そして、現在そこに住んでいるのは、店主である魔女と、近くの村出身の女性二人きりだった。

しばらく雨が続けている。

どこか湿り気をおびた店内を眺めながら、店番を兼ねてこの家に住んでいる多紀は、溜息をついた。

時期とはいえ、こう雨が続くと、建てられた年代もわからないくらい古い店舗兼住居である建物は、あちこちで困った事態になる。

例えば、湿気で扉がうまく開かなかったり、普段使わない部屋で雨漏りがしたり、部屋の椅子や敷物がかび臭くなったり、などである。

掃除はこまめに行っているし、空気もなるべく入れ換えるようにし

ているが、どうにもならないこともあって、店と住居部分の管理を任されている身には憂鬱な時期なのだ。

客足も鈍るが、それでも、雨の日が続くと、やってくる客もいる。その客の目当ては、森の中で採れる石だ。

晴れた日には他の石と同じにしか見えないが、雨が降り、水を蓄えると独特の光を放つ。魔女だけでなく魔法使いと呼ばれる人々から、魔力の宿るそれは重宝されており、好んで装飾品に使ったり、砕いて一般の人向けのお守りを作ることもあった。

この森には、その良質の石が多数存在している。

森の所有権を主張する店主は、それを結構な高値で売りさばっていた。そのため、魔女は石探しには比較的熱心なのだ。

多紀は、窓の外を眺める。

前回来たの日から数えても、そろそろ『常連』が訪れてもいい時期だった。

そう思っ、暇潰しに広げていた雑誌を閉じる。

時刻はちょうど、お昼の少し前。

朝の弱い魔女も起きてくるだろう。そう考えて立ち上がりかけた時だった。

重い扉がゆっくりと開き、風と雨が室内に吹き込んでくる。

客が来たことが分かるように取り付けられた小さな鈴の音も、今日は風に吹き消され、聞こえない。

それでも、扉が開いて入ってくるのは『客』とわかっているので、愛想笑いを浮かべつつ、多紀は顔を上げる。

「いらつしゃいませ」

いつものように声をかけるが、開いたままの扉の向こうから、雨の雫だけでなく木の枝や葉が舞い込んできて、思わず動きを止めてしまう。

それに気が付いたのか、外にいた男が慌てて中に飛び込み、扉を閉めた。

「悪い、汚しちまったか」

申し訳なさそうに謝った男は、扉の前から動かずに立ち尽くしている。

着ている外套はびしょ濡れで、そこから垂れた水滴が床を塗らすことを気にしているのかもしれない。

「お気になさらず。魔女の部屋の惨状に比べたら、そんな水滴や風で飛んできた木の葉なんて、かわいいものです」

「雫さん、相変わらずだなあ」

店主の名前を口にする、男は笑う。

この店舗兼住宅の主は、散らかすことは得意だが、片付けるのは苦手という困った性分なのである。多紀が何度部屋を片付けても、嫌がられるくらい文句を言っても、面倒の一言で終わらせてしまう。住居の様子は客には教えていないが、雫がこちらへ来るときは、だらりと服を着崩していたり、髪が跳ねていたり、どこに物を置いたがわからなくなつたと言っては、多紀に怒られているので、客も大体の様子を察しているのだろう。

「いつもの、あれでいいんですよ？」

男の脱いだ外套を受け取りながら多紀が問いかけると、ああ、と彼は言った。

「どうしても、ここの森のじゃないとダメっていうからさ」

困ったような顔をして、どこか男は嬉しそうだ。

「用意してあります」

「さすがだね」

面倒、眠いが口癖の魔女だが、金払いのいい客に対しては重い腰も簡単に上げる。

そろそろこの男が来るころだと、ふつぶつと文句を言いつつも、

魔女は昨日森の中へ出かけていったのだ。

「今回の石は、上物だと言っていましたよ」

外套をかけた後、男に椅子を勧めると、多紀は用意していた袋を手渡す。

確認のために、男は中身を見るが、小さく肩を竦めて首を振った。

「やっぱり、どこがどうすごいのか、わからない」

男の言いように、多紀も笑う。

そうなのだ。この石は、魔力を持たない者が見ても、小汚いただの石だ。当然、多紀にもそこらにごろごろしている石と同じにしか見えない。

「私ですよ。だから、うっかり捨ててしまわないように気をつけているんです」

拾ってきたものを所定の位置に雫が置いてくれないので、大事なものが行方不明になるたびに、家の中を歩いて探し回るのは多紀だ。それほど広くはないし、雫の大体の癖を把握してしまった今では、どこらへんに何を置き忘れるかなどわかっているが、ここへ来た当初は失敗もよくしたものだ。

「でも、雫さんが見つけたものは、いつも品質が良いって、誉める。この森の状態もいいんだろうなって。俺たちがいる場所は、あんまり良い感じの場所じゃないしな」

男の顔は、話しながら、段々と緩んでくる。

頭の中には、この石を欲しがっている相手 魔女なのだが、

その姿が浮かんでいるのだろう。

雫が言うのだから、どこまで本当かはわからないが、この男は、魔女に惚れて、その彼女を振り向かせようと、熱心に贈り物やらなにやらを渡しているらしいのである。雫の扱う石も、どこで聞きつけたのか自分の惚れた魔女が欲しがっていることを知って、わざわざ隣国から買いに来ているのだ。

雫のように主を持たない魔女は自由気ままに生きているが、男の思い人は、生まれた時から仕えている主がいて、他国にはほとんど出られない。だから、代わりに俺が、ということらしいが、その熱心さと根性には、頭が下がる。

もっとも、雫に言わせれば、魔女は変わり者が多いし、恋愛に関しても淡泊なので、そのくらいしても振られることがほとんどらしい。

それでも諦めない男に、雫は、どこまであの根性が続くのかが気になるらしく、密かに男の来店を楽しみにしているようだった。

案の定、多紀と男が話している声が聞こえていたのだろう。

「相変わらず、骨抜きだねえ」

店と住居を隔てる扉が開き、中から中年の女が出てきた。

いつもとは違い、少しだけちゃんとした格好　　といっても、

一歩間違えれば寝間着と間違えられそうな着方ではあるが、雫にしては上出来な姿をしている。

髪もちゃんと梳かした状態だ。

「魔女なんか惚れて骨抜きにされちゃうなんて、どうかしているよ」

いつもと同じように、皮肉なんだか、面白がっているのかわからない言葉を、男に投げかけた。

しかし、男の方は、気にしていない。反対に、骨抜きなのは確かだなどと、呑気に言っている。

「まったく、嫌味も通じないとはね。ところで、いい返事はもらえそうかい？」

「どうか。でも、笑ってくれるようになった」

彼の思い人の魔女は、無愛想で、あまり笑わないという。今日の前にいる魔女とは大違いだ。

「それに、名前を呼んでくれるようになったし」

きちんとしていればそれなりに整った顔をしているのに、『でれでれ』という言葉がぴったりの表情を浮かべているため、全部台無しだ。

雫はそれを見て、笑いをかみ殺している。

「おまけに、次の休みに日に、部屋に招かれた」

男ににやにや笑いは止まらない。さっきよりもひどくなっている。「惚気はそこまで。耳がおかしくなるよ」

棚においてあった煙草に手を伸ばすと、雫はわざとらしく溜息をつく。

雫の気持ちは、多紀もわかる。

来る度、惚気話はどんどんふくれあがっていくのだ。

それでも多岐が黙って聞いているのは、男が本当に嬉しそうだかなのかもしれないし、こんなに愛されている魔女というのに興味があるせいかもしれない。

多紀が唯一知っている魔女は雫だけだから、様子もまるで違う魔女がいるのだと思うだけで不思議な気分になるのだ。

世の中の魔女には変わり者も多いと言うが、男から聞く件の魔女は、変わってはいるが、雫とは違うおもしろさを持っているような気がしている。

「また、来る」

そう言って、嬉しそうに帰っていった人が、再び訪れることはなかった。

魔女の手をとって、二人で逃げたと聞いたのは、季節を越えた頃だろうか。

「どうしようもないね」

そう言って雫は笑っていたが、念願かなって魔女を手に入れた男に対して、悪い感情は持っていないのだろう。

そうでなければ、彼女が、言われる前に石を探しに森をうろついたり、客の相手をするために、店へ顔を出すことはない。

「幸せになれるといいですね」

多紀が言くと、雫はなれるさと自信たっぷりに答える。

「なにしろ、根性で魔女を口説き落とした男だよ」

「いいなあ、私にもそういういい男が現れないでしょうか」

「むりむり。こんな森の奥で、魔女と暮らしている限り、いい男なんて現れたりしないよ」

「ですよ」

やってくるのは、得体の知れない相手ばかりだ。

その中の、たまにいる『男』は、すでに相手がいるか、何か裏がある者ばかりなのである。

あまり、恋愛方面でお近づきにはなりたくない。

かといって、多紀の幼馴染みの男達はほとんど結婚してしまっているし、年の近い知り合いの男性もいない。このままでは出会いがないまま行き遅れ人生まっしぐらなのは間違いなかった。

だから、あんなふうに純粹に思いをぶつけられた魔女のことは、少しだけ羨ましくもある。

「ほとぼりが覚めた頃、二人で店を覗くと言っていたよ。あの魔女は、この森に興味があるようだからね。自分の手で石を採ってみたいんだとさ」

「本当ですか？ 私、楽しみにしてます」

男がベタ惚れだという魔女に会ってみたいと、多紀は思っていたから、その約束は嬉しい。

雫が吐き出した紫煙が、静かに立ち上っていく。

少し籠もった空気を入れ換えようと、多紀は窓を開けた。

窓から見えるわずかな空を、雲が厚く覆っているのが見える。

また、雨がしばらく続くのかもしれない。

もし、二人がやってくるとしたら、やはり雨の日なのだろうか。

いつか叶えられるかもしれない約束を思いながら、多紀は今にも降り出しそうな空を見上げた。

2. いと

『糸車を無くしてしまったのです』

その客は、細く長い指先でゆっくりと髪をかき上げながら、そう言った。

あらわになった首も細い。

きつと、服に隠れて見えないところも、細いのだろう。

「それは、つまり、糸車を探してほしいということでしょうか？」

一応ここは魔女の店だ。

物は売るが、探し物をするのではない。だいたい、そんな面倒なことを、主である雫がするはずもない。

『いえ、どこで無くしてしまったのかは、わかっています』

悲しげに俯いた客の目から、ほろりと涙がこぼれた。

綺麗な透明の水滴は、頬を滑り落ち、客の白い服に染みを作る。

その染みは、やがて青黒く変色し、服に穴を開けた。

ああ、やはり、と多紀は思う。

入ってきた時から、おかしいなと思っていたが、目の前で泣いているのは、人ではない。

魔女の店に魔物の類が来るのはめずらしいが、ないわけではないので、驚かないが。

『申し訳ありません。糸車を無くして以来、力の制御が上手くできないのです』

自身が流した涙が服を駄目にしたことに、気が付いたのだろう。

客はそつと涙を拭くと、深々と頭を下げた。

『魔女ならば、わたくしを人のように見せる薬を作れないかと思ひまして』

「人のように見せる薬、ですか」

繰り返しながら、果たしてそういう薬を作ることば可能なのだろ

うかと考える。ここに住み込んで数年。魔女である雫から、そんな薬の話を聞いたことはなかった。

だが、ないとは言えない。彼女が知らないだけで、存在するのかもしれないのだから。

どちらにしても、雫に聞くことが先だろう。

「店主に確認してまいります。少し待っていただけますか？」

そう言う、はいと答えて客はゆっくりと頭を下げた。

起きてくださいと寝台の中の店主を揺さぶると、布団の中からうるさいねえとくぐもった声が聞こえた。

「ちゃんと起きてるよ。あんまり気持ち悪い空気がただよっていたから、出ていくのが嫌だったのさ」

面倒そうに起き上がり、傍らにある煙草に手を伸ばしたのを見て、多紀が目を取り上げる。

「寝台の上での煙草は禁止って、何度も言っているじゃないですか」強引に煙草を取り上げられ、雫が不服そうな顔をした。

「私の家なのに……」

そうぶつぶつ言いながらも、雫は寝台から下りる。そのままの格好で出て行こうとするのを見て、多紀が慌てて服を引っ張った。

「着替えくらいしてください」

「はいはいはい」

「返事は1回で！」

多紀が手伝って、というよりも、多紀にされるがままに服を着て髪を整えられ、準備が終わった時には、雫は『ああ面倒』をすでに5回も口にしていた。

「あれだけ瘴気をまき散らしているんだからねえ。絶対面倒事だっと思っていたんだよ。ぐずぐずしないで、逃げちまえばよかった。……ところで、多紀、あんたちゃんと瘴気除けのお守りを持っているだろっね」

「当然です。この若さで私、まだ死にたくないです」

魔女ならともかく、何の力もない多紀が、魔物相手に真正面から向き合って話が出来るわけがない。

しかも、相手は、まったく力を制御できず魔物の特徴でもある瘡気が漏れまくりな状態なのだ。

「よし。ならば、会いに行こうじゃないか」

面倒だといいながら、どこか面白そうにも見える雫の後ろをついて歩きながら、多紀は急いで先ほど魔物が言ったことを伝えた。

「詳しい理由を聞こうじゃないか」

雫がそう言っていると、椅子に座っていた魔物は、おずおずと顔を上げた。

「どうして、人間に見せかけたいなんて思ったんだい？ 糸車は無

くしたと言っていたけれど、それが関係あること？」

『無くした糸車を拾ったのが、魔法使いだからです。そして、彼はそれ持ち帰り、自分のものにしてしまいました』

「それは災難だったね。魔物の持ち物は、使いようによっては、魔法使いの益になるからね。欲しがる奴はいくらでもいる」

魔女と呼ばれる人間は、生まれた時から持っている魔力の量は決まっているが、魔法使いの力は生まれつきのものではない。才能ももちろん必要だが、膨大な知識と努力があって初めて使える力なのだ。

だが、中には真つ当な方法ではなく、簡単な方法で力を手にしようとするものもある。

例えば、魔物の持ち物や、体の一部は、それ自体に魔力を有していることが多いので、足りない力を補うことも可能だ。故に、わざわざ魔物を狩ろうとする魔法使いもいる。

もちろん、その行為は誉められたことではないし、場合によっては魔力に飲まれ、自らを破滅させることにもなる。正式な魔法使い

たちの間では、表向きはよくないこととされているくらいだ。

『わたくしは、魔物としては中級程度の力しか持っていないのです。両親から受け継いだ糸車が無ければ瘴気をうまく押さえることもできない。最初は自力で取り返そうとしましたが、屋敷の外には魔物を退ける結界があるため入れないし、魔法使いが外に出たときを狙っても、気配でわかるのか、いつも逃げられてしまつて』

「だから、魔物の気配をうまく消して、魔法使いに近づきたいと？」

『はい』

「しかし、うまく人間に化けたとして、そううまくいくと思つているのかい？」

『人をたぶらかす方法なら、幾つも知っております故』

それまでおどしていたはずの魔物は、唇を釣りあげて笑つた。深い藍色の瞳が露わになり、怪しげな光を放つたのをみて、思わず多紀は手首の腕輪に視線を落とした。この腕輪は、雫特製の瘴気や魔力から身を守る守護がかけられたものだ。雫の腕は信じているが、相手の力が強ければ、完全に防ぎきることができない場合もある。

目の前の魔物は、自ら力の中級程度と言っているが、やはり彼らの目からは、魔女や魔法使いと違う得体の知れない力を感じてしまふのだ。

よく魔物と出会つて魅了されたという話を聞くが、そのどれもが相手の魔力が強いわけではないということも多紀は知っている。

それほど、魔物が人を魅了する力は特殊なのだ。

「あんまりうちの店員を脅かさないでくれよ」
身を強張らせていた多紀に気が付いた雫が、やんわりとそう口にする。

『ああ、申し訳ありません。うつかりしてありました』

その言葉とともに、魔物の目が自分から逸らされた気配がしたので、多紀は恐る恐る顔をあげる。

そこには再び目を伏せて悲しそうにうなだれる魔物の姿があつた。

「その依頼、引き受けてもいい。そうだね、報酬は、あんたが取り戻した糸車で紡いだ糸　　っていうのは、どうだい？」

『そんなものでよろしいのですか』

「あんたにとつては、そんなものでも、魔女にとつては、ありがたいもののなのさ」

雫は嬉しそうだが、多紀には魔物が紡ぐ糸がどれほどの価値があるのかはわからない。雫が扱うものの殆どがよくわからないものばかりだが、糸というくらいだからそれをつかつて布を作る程度のことしか思いつかないのだ。もちろん、それは糸が多紀が思う『糸』と同じという前提があつてのことなのだが。

「三日後においで」

その時まで、望むものを作つておいてあげるよと言つ雫に、魔物はまた深々と頭を下げた。

「さあ、多紀。あんたの髪をよこしな」

魔物が出て行つた後、雫が発した言葉に多紀は首を傾げる。

妙な行動や発言が多いとはいへ、意味のないことはしない雫だ。

その彼女が言つたのだから、魔物の欲しがる薬に、何か関係があるのだろう。

そう思うのだが、目の前で嬉しそうに笑い右手を差し出す雫に、うさん臭さを感じるのは、気のせいではないはずだ。

「魔力の欠片もない人間の髪を使って、ちよつとした薬を作ろうかと思つてね」

後ずさつた多紀に、彼女の不安を察したのだろう。一応手だけは引つ込めて、説明をする。

「違う薬の応用なんだけどね、試してみたい方法があつて」

雫が言うように、多紀には魔力はない。多紀だけではなく、この地に住む殆どの人間には、そんな力は存在しない。

数少ない魔女は別として、何百人に一人くらいしかない魔法使

いでも、最初持っている魔力は小さいのだ。

「私じゃないと、駄目なんですか」

「いや。誰でもいいんだけどね。村にいつて髪をくれって言ったら、ただの変質者じゃないか」

すでに村での評価は変人だということは知っているはずだが、そのあたりはいいらしい。

「それに、どのくらいの量が必要かわからないんだ。いちいち貰いにいくのは面倒だろう」

まさか髪の毛全部をむしり取る気なのかと、ため息をつきなくなる。さすがにそこまではしないと信じたいが。

「使うのなら、給料に上乗せしてください。それなら、いいです。でも、それって後から何か害が出たりしないですよ」

多紀にとって、魔物はわからない存在だ。生態や種族など、雫の元で働くようになって昔よりは詳しくなったが、彼らの考え方や行動は、理解できない。

そんな彼らに自分の髪が入った薬を使われるのは怖い。

「大丈夫。一応制限はつけるし、無理やり作る薬だ。持続性もないはず」

「ほんとですか。雫さんの大丈夫は結構あてにならないですよ」

思えばそれで、何度かひどい目にあった。

「よくわかってるじゃないか。さすが付き合いが長いだけあるね」

「ふんぞりかえって、言わないでください」

確かに付き合いは長い。

森に一番近い村で育った多紀にとって、ここは遊び場でもあった。幼馴染みたちと一緒に、探検しつくした森なのだ。魔女にいたずらしたことも、魔女からお菓子をごちそうになったこともある。

気まぐれで、面倒臭がりで、寝てばかりいるけれど、嫌いにならないのは、文句をいいつも相手をしてくれた思い出があるからかもしれない。

「ほんとに何かあったら、責任とってもらいますからね」

多紀がそう言うのと、その時は一生面倒くらい見るよと冗談めかして笑われた。

「それに、実際作れるかどうかわからない代物さ」

そう肩をすくめてみせる雫は、おもちゃを与えられた子供のようにも見えた。

結局のところ、彼女は薬を作ることが楽しいのだ。

失敗すれば、悪かったと客に謝るだろうし、成功すれば未練のひとも残さずに、それを客に渡すだろう。

自分の評判がどうであろうとも、気にしない人なのだ。

それが、魔女というもののなのか、それとも雫がそういう性格なのか。

多紀にはわからないが、変人だと言われながらも、村の人たちに受け入れられているのは、そのせいなのかもしれない。

『約束通り、やってまいりました。薬はできていますでしょうか』

訪れた魔物は、多紀の姿を見るなりそう言った。

三日前よりも、さらになにもかもが薄く細くなっている気がする。そのまま消えてしまいうでもあった。

「薬の効用は一時的なもの。せいぜい1日程度だ。今のあなたの体力と魔力では、失敗するかもしれない。それでもいいなら、持っていくな」

雫の言葉に、魔物は卓上に置かれた薄墨色の丸薬をじつと見つめていた。

やがて、細く白い指先がそれに触れ、転がし、確かめるように手に取ったあと、ゆっくりと頷いた。

「いただきます」

その藍色の目に強い決意を宿し、魔物はそう告げた。

うまく行ったかどうかは、いつのまにか届いた大量の糸が教えてくれた。

引っ張っても切れない透明で細い糸は、何かを連想させるものだったが、多紀は気にしないことにした。

その糸を雫が何に使ったかは、また別の話である。

3・うつくしい

そこは、どこにでもある小さな森だった。

強い魔物の気配も、大型の肉食獣の気配もなく、人の手が入ったことがわかる程度に下刈りされ、木々が日を遮らないように、細い道の上の枝は切られている。

人の出入りがあるのは間違いない。

ならば、すぐに誰かに見つかつてしまうのだろうか。

女は、木にもたれかかるようにして座り込んだまま、そんなことを考えていた。

迷い込んだ知らない人間に、どんな反応を返すだろう。

ここへ来る前に見た近く个村は、小さいながらも活気があった。

それなりに若者もいたし、広場では子供たちが駆け回っていたように思う。

目を閉じると、風に揺れる木々のざわめきが聞こえ、水の匂いもする。

穏やかで、心地よい森だから、村人がこの森へ来るならば、それはさほど先のこともないだろう。ここに素性の知れない女がいれば、警戒されるだろうし、もしかすると追い出されるかもしれない。それでも、動きたくないと思うのは、行く当てがないからだけではなく、居心地がいいせいだ。

このまま、この場所で朽ちていくのもいいかもしれない。

そう思っ、再び物思いに沈みかけたとき、足音に気がついた。

しめった地面に積もった葉がこすれるようなその音は、軽い。

思っていたよりも、見つかるのは早かったようだ。

村人が、それとも音からして、子供か。

確実に近付いてくる足音の方向を見ると、確かにそこには人がいた。

だが、予想に反して、立ち止まってこちらを見ているのは、小柄

な老婆だ。

綺麗に纏められた白髪に、暖かそうな上着を羽織っている姿は、普通の村人に見える。

だが、榛色の瞳は、こちらを値踏みするかのように鋭い。

ああ、彼女は魔女だ。

本能在、そう告げる。

同じ匂いだ。懐かしくもあり、忌わしくもある同族の気配を投げやりな気持ちで見つめる。

「魔女だね」

見た目よりも若々しい声で、問いかけられた。

「どうして、こんなところにいるの。主をなくしでもした？」

答えずにただ見つめ返していると、年老いた魔女はため息をついた。

「答えたくないなら答えなくてもいいけれど、私の大事な森で倒れるのは迷惑よ」

あなたの森、と口の中で繰り返す。

「ここは、あなたの住処？」

かすれた声で尋ねると、老婆は笑った。

「そう。住まわせてもらっているわ」

「……一人で？」

暗に仕えるべき相手はいないのかとの意味をこめる。そのことが相手に伝わったのか、老婆は、そうだと答え笑った。

「強いて言えば、この森そのものが私の主でもあるわ。ここで暮らし、森を穏やかにし、ここで私は死ぬ」

歌うように、老婆は言葉を紡ぐ。

それに呼応するように、木々がざわめき、風が吹いた。

老婆は森に愛されている。

不思議なことに、感覚として、そのことがわかる わかってしまふ。

同時に感じたのは羨ましいという気持ちだ。

この森は美しい。優しく穏やかで、魔女の心さえも癒す。

それとも、目の前にいる魔女が穏やかな雰囲気を纏っているからこそ、森は美しいのだろうか。

見回すと、木々の間からこぼれる光が、柔らかに辺りを照らし、等しく老婆にも自分にも降り注いでいた。

「綺麗」

そう呟くと、老婆は優しい笑みを浮かべる。

「美しいでしょう？ この森は、ずっと魔女が守ってきた。私が何人目の魔女かはわからないけれど」

魔女が守る森。

その言葉に、女の口から溜息が漏れた。

だからこそ、こんなにつくしいのだろうか。

なにもかもなくしてしまい、見ている全ては味気ないものだったはずなのに、この風景の中にずっと埋もれていたいと思うのは、魔女が関わる森だからなのか。

そして、自身の目から、涙がこぼれているのは、何故なのだろう。
「馬鹿な子だね」

近付いてきた老婆に頭を撫でられ、その行為そのものが初めてのことだと知る。今まで、彼女に必要以上に触れたものはいなかった。母親も父親も、生まれたときにはいなかったから、抱きしめられた記憶もない。主は、あくまで女にとっては従うべきものであったから、やはり近くにあっても互いに触れ合うことなどなかった。『魔女』として暮らしていた屋敷でも、使用人たちは、彼女に対してはよそよそしく接し、こちらが話しかけなければ、近づくことも無かったように思う。

ならば、年老いた魔女が自分に触れるのは、同族であるという理由からなのだろうか。ほとんど隔離された生活を送っていた女は、他の魔女に会うのも初めてだったから、本当はどうなのかさえ、わからない。

「ずっと、一人だったの？」

「主は、いた」

「そう。それでも一人きりだったのね」

心が、という言葉に、何かがずとんと落ちたような気がした。

そうだ。確かに、主はいたけれど、いつも孤独だった。

「名前は？」

「雫」

そう答えると、いい名前だと誉められた。

唯一、主が自分にくれたものだ。好きではなかったが、それでも育ててくれた人だ。魔女の自分を必要だといってくれた唯一の人。

その家を出たのは、主が死んで、彼の後を継いだ息子を、どうしても新たな主として認められなかったからだ。

自分にとって、仕えるべき相手は、あの人であって息子ではない。ましてや、魔女などいらないといった男の側に、彼女の居場所は存在しなくなった。

「行く場所が定まるまで、ここにいればいいわ」

老婆の言葉に、雫は目を瞬かせる。

「いいの？」

「ここに迷いこんだのも、何かの縁。私も一人でいるのには飽きてきたところだし、後継者も必要なのよ」

「後継者？」

「そう。ここは魔女の森。私も、もうそれほど長くはない。だって、誰かが引き継がなければならぬでしょう？」

茶目つ氣たつぷりに片目を閉じると、老婆は手を差し伸べ、雫の手を取る。

「でも、私が引き継ぐとは限らない」

躊躇う気持ちが、老婆の手を拒みそうになる。

「別に、今すぐどうするか決める必要はないわ。私、ここでちょっとした店もやっているのよ。それを手伝ってくれるだけでもいいから。年をとって、力仕事も辛いよねえ」

そんなふうに言われて、ほんの少しの間なら、と結局雫は手を引

かれるままに、立ち上がった。

ほんの、短い間。

ちよつとだけ、この美しい森で暮らしてみてもいい。
どうせ、行く当てなどないのだから。

最初はそんな気持ちだったはずなのに、結局、女は小さな森の不
思議な店に、ずっと住み続けることになった。

4・えかき

絵描きが村に来ているんだってさ。

そう意味ありげに雫に言われ、商品整理をしていた多紀は、手を止めた。

普段のこの時間ならば、雫はまだ寝台の中のはずなのに、わざわざ店の方までやってきて、何を言い出すのか、と思ったからだ。

「何か企んでいます？」

声にやや不信感を忍ばせて、多紀は雫の反応を伺う。

いつもと同じようなにやにや笑いに、煙草。着崩した服は相変わらずよれよれで、普段と様子は変わらない。

だからといって、何か企んでいないと言い切れないのが、雫だ。

「いやだねえ、多紀。雇い主を疑うなんてさ」

それならば、もう少し真面目な顔と格好をすればいいのだ。

そんな胡散臭い顔で言われれば、警戒するのは当然である。

「自分の普段の行動を顧みてから、言ってください」

「欲望に忠実に生きているだけだ」

自慢にもならないことを堂々と言われて、多紀は呆れるしかない。いつものことだが、こうやって多紀をからかって、なかなか本題に入らないのも、雫の悪い癖だ。

「とりあえず、私、絵描きは嫌いです」

きっぱり言って、商品整理に戻ろうとした多紀の服を雫がひっぱる。

「おや、そうなのかい？ 絵描きなんて、会ったことも見たこともないはずだよ」

痛いところをつかれ、多紀が押し黙る。

恨みがましい目差しなのは、雫が言おうとしていることをなんとなく察しているからだ。

「それとも、絵描きになろうって奴に知りあいでもいるのかい？」
「知りません」

「とにかくさ、その絵描きに頼まれたんだよ。村まで届けてほしいんだってさ」

「……何をですか」

「剣」

「絵描きなのに？」

「ああ、絵描きなのにさ」

言いながら、雫は細長い袋を多紀に見せた。膨らみ具合から、恐らくそれが雫に言う剣なのだろう。

「この剣に、ちょっとした魔物避けの魔法をかけて欲しいって頼まれたのさ」

薬や得体の知れないものばかり扱う店ではあるが、こうやって持ち物に護符の効果のある魔法をかけて欲しいと依頼してくるものもいるのだ。労力が低い割には、金を取れるので、雫はよく依頼を受ける。

それ自体は珍しくはないのだが、問題は、いつ雫はこの剣を預かったのだろう。

店番をしているのは多紀だが、ここ最近、客は一人もこなかった。雫が村へ出掛けていないのも知っている。

それとも、多紀が知らない間にこっそり外に出たというのだろうか。

これが一番可能性がありそうだった。

「一昨日、夜中にちよつと森をうろついていたら、自称絵描きにばったり会ったんだよ」

まるで多紀の心の内を読んだかのように、雫は言った。

彼女は時々、ふらりと森の中へと足を踏み入れることがある。特に予定があつての行動ではないので、多紀もその全てを把握していなかった。

「夜中に剣を持って彷徨っている絵かきから依頼を受けるなんて、

何考えてるんですか。変な人だったら、どうするんですか」

比較的安全な森とはいえ、時には妙なものもやってくる場所だ。魔物程度なら、魔女である雫には害もないだろうが、悪意のある人間がこないとは言えない。昔に比べて平和になったとはいえ、夜盗の類がいなくなったわけではないのだ。

「いや、だって困ってたからさ」

「困るって、何を？　まさか、こんな小さな森の中で迷子とか、そんな馬鹿なこと」

「それが、あつたんだよ」

小さな子供でも迷わないこの森で迷子？

頭を抱えそうになった多紀に追い打ちをかけるように、雫の言葉は続く。

「なんでも、月に照らされた森を絵にシたくて歩いているうちに、わけがわからなくなつたんだとさ。ほんのちよつと右に歩けば、森の外だったのに、妙な男だよ」

「そうですか」

やる気も聞く気もない多紀の手は、商品の方へと伸びている。やりかけの片付けを昼前までには終わらせてしまいたいのだ。それなのに、雫はさらに多紀の衣服をひっぱって、こちらへ視線を向けさせようとしている。

「で、話をしているうちに、意気投合してさ。私が魔女だってことがわかって、守護の魔法をかけてほしいとか言ってきたんだけど、その流れで、うちに店番がいるって話をしたら」

「勝手にそんなこと教えないでください」

「もしかしたら、多紀が知り合いかもって話になってさ」

「は？」

今度こそ、完全に、多紀の手が止まった。

大きく見開かれた目は、驚きというよりも、嫌な予感がするという気持ちを映している。

「だからさ、言つたのさ。だったら、剣に魔法をかけ終わったら、

あんたのところに店番を使いに行るよってね」
ひどく楽しそうな雫に、多紀は溜息とともに、信じられないと呟いた。

抱えた剣は、とても重かった。

当然だ。多紀は小柄な方ではなかったが、普段から大きな剣など持たない。せいぜい短剣だ。斧なら持ったこともあるし、それだつてそれなりに重いものだが、やはり『剣』というだけあって、どこか恐い気がする。この森で生活するようになってからは遠ざかつていたが、まだ街の屋敷で働いていたころ、それを奮うのを見る機会は何度もあった。

血を流して倒れる姿は見ていて気持ちのいいものではないし、倒れた人間を見て、腰を抜かしたこともある。喧嘩のあげく剣を振り回した人間も街では珍しくなかったのだ。

けれど、決してそれを見慣れるということとはなかった。

きれいな事だと分かっていても、森で獣を狩るのとは違う、ただ傷つけ合うだけに使われる剣は、どうしても好きになれない。

それでも、腕に抱える剣に嫌悪感だけでなく、仄かに暖かいと思う気がするの、雫がかけた守護魔法のせいだろうか。

人の命を奪うためではなく、持ち主を守るという目的でかけられた力は、この森の気配と同じく優しい。

ただ。

気になるのは、この剣の持ち主であるという自称絵描きである。

自分を知っているかもしれないという相手。

変なところで迷子になったり、絵描きのくせに剣を持っていたり。そんな人間に、心当たりがないわけではない。思い出の中にしまい込んで、すっかり忘れていたが、そういうことを言いそうな相手をたった一人だけ知っているのだ。

思えば、その人物には雫同様、振り回された記憶しかない。

いつだって勝手に多紀に関わってきて、飽きたら他の人間に意識を向けてしまう。二度と会うことはないと思ったから、全部忘れてなかったことにしてしまったのに。

今更、また関わりを持たれるなど、冗談ではない。
だから、願う。

どうか、自分の知り合いではありませんようにと。
似たような性質の別の人間でありますように、と。

だが、その期待は、村の広場に立っている背の高い男の姿を見つけたときに、脆くも崩れ去ってしまった。

「あー、やっぱり多紀」

こちらに気が付き、そういつて笑ったのは、確かに見覚えのある顔。

かつて、同じ屋敷で働き、その主人が借金を抱えて奉公人たちを解雇したとき、一緒に路頭に迷った相手だ。

俺は絵描きになると宣言して街を飛び出して以来、一度も会っていない。

あの時は、多紀を含め周りの人間が皆、絵描きなど無謀だと止めたけれども、聞かなかった。

「……久しぶり」

外に言うべき言葉も見つからず、多紀はそう口にする。

「ほんと、久しぶりだよな。魔女が話す店番が、なんとなく多紀に似てるからさ。もしかしてって思ったんだ。前に、このあたりの出身だって言っていたし」

「奉公先を紹介してくれたのが、魔女だったんだよ」

そのことに責任を感じたのか、単に魔窟となりかけた我が家をどうにかしたかったのか、奉公先を失って途方にくれる多紀に、どうせ暇なら手伝えと声をかけてきたのが雫だったのだ。

「そういうあんたは、どうなの。うちの雇い主は、あんたは絵描きって名乗ったって言っていたけれど」

「え、ちゃんと絵描きだよ。一応、俺の絵を気に入って、買ってく

れるような相手もいるんだ。とはいっても、まだまだ駆け出しだから、絵だけでは食べていけなくて、傭兵まがいのことや、商隊の護衛をしてる」

だから、剣なのか。

実用的な剣の重さに納得できた気がした。

彼は、多紀がいた屋敷でも、主人の護衛として働いていたのだ。幼い頃両親を亡くし、叔父である傭兵に育てられたと言う彼は、剣の腕は確かで、人懐っこい性格から主人にも気に入られていた。

誰にでも優しく、誰にでも愛想よくて、結局誰も選ばず、一人きりで行ってしまった男だ。当時、彼に焦がれて、叶わなかった女性を何人が知っている。彼の旅についていこうとした者もいたようだけれど、その誰もが置いて行かれてしまった。

そのことを、男は知っているのだろうか。

「これ、魔女から」

そう言っただ剣を渡しながら、本当は知っていたのではないかとも思う。

結局のところ、誰にも本心は見せなかったし、一番深いところには、誰も立ち入らせなかった。自分に対する好意に対して鈍感なふりをしていたことも、多紀は知っている。

結局、どんなに願っても、きっと彼は一人で行くことを選ぶのだろう。置いていかれる方の気持ちなんて、おかまいなしなのだ。

屋敷内で、年が近いという理由でそれなりに親しかったはずの自分にも、たった今まで連絡ひとつなかったのだから。

「あなたの希望通りの守護魔法をかけてあるそうよ」

「お、早いな。やっぱり評判通りだ」

今も、彼は無邪気に笑って剣を受け取っている。その笑顔は昔と変わらず、人を引きつける華やかさがあった。

それを見ないように少しだけ雫は視線を逸らしたのは、心の中にまだわだかまりがあるからかもしれない。

「うちの魔女は、優秀だからね。安心していいよ」

素っ気ないふりで、魔女の仕事について口にするが、言っている事は真実なので、声に少しだけ誇らしい気持ちがある。

本人には、絶対に言わないが、雫が優秀であることは、多紀は認めているのだ。

だから、人に雫のことを話すときは、胸をはって彼女を誉める。

「楽しそうだなあ、多紀」

男が、多紀の顔をやけに真剣な目差しで見つめながら、ふいにそんなことを言う。

「本当に、楽しそうだ。屋敷にいた頃は、いつも仏頂面しててさ、俺にも怒ってばかりだった」

「それは、あなたがいつもだらしない格好していて、部屋は汚し放題で、血のついた剣も放りっぱなしで……」

言い掛けて、まるで誰かのように　魔女と同じだと思う。

魔女にも同じように怒ったり説教したり文句を言っている。

でも、魔女とこの男は違う。

どこか、似ている二人なのに、確かに違うのだ。

「なんだかさ、魔女も、俺と似たような雰囲気を感じたのにさ、多紀は魔女のことを話すとき、いい顔なんだよな」

言われたとおりのことを、多紀も思ってしまった。

この男を怒っていたときは、胃も痛かったし腹立たしかったしちつとも言うことを聞いてくれないことが嫌だった。

自分のことをからかってばかりで、本心を見せてくれないから、男を見るのが、少しずつ辛くなっていった。そして最後は彼女を一人残して、いなくなってしまったのだ　好きだと言ったくせに。

「あーあ、馬鹿だよなあ、俺。いろいろ、本当に莫迦だった」
天を仰いだ男の顔は、見えない。

悔いているのか、それとも悲しんでいるのか。どちらにしても、もうすでに終わってしまったことだ。

あの日、彼は一人で旅立ち、多紀は生まれ故郷に戻った。

「同じだよ、私も。いろんな意味で馬鹿だった」

もうちょっと、素直になればよかった。

もう少し、優しくできればよかった。

それでも、置いて行かれただろうけれど、今のように後悔はしなかったかもしれない。

なかったことを思い返して、あれこれ悩むこともなかったかもしれない。

なにより、そうしていれば、ちゃんとお終いに出来ていただろうし、強引に忘れようとする思い出ではなく、懐かしい記憶として残ったはずだった。

「俺のこと、ちゃんと好きだった？ 今更だけど」

「うん。好きだったよ、今更だけど」

今度はちゃんと素直に言えた。あの時は、一度だって面と向かって言えなかったけれど。

「そうか、よかった。俺も、多紀のこと、好きだった。全部、本当に、冗談じゃなくて本気だったんだ」

男も、そうだ。

彼は悪ふざけの延長でしか、その思いを多紀に伝えてくれなかった。

お互いさまだ。

そう思えてくると、自然に笑みがこぼれてくる。最初は雫に言われて嫌々だったけれど、ここで男と会うことが出来てよかったのかもしれない。

男の方も同じなのだろう。

初めて見る、優しい笑みを浮かべている。もっと早く見てみたかったが、今だからこそ、知ることが出来た表情だ。

お互い、これでふっきれたということなのかもしれない。

「魔女に伝えておいてくれ。約束の報酬は、ちゃんと後日届けるからってさ」

「報酬？ お金じゃなくて？」

「ああ。ちょっとお金が足りなくてさ。別のものを渡すって約束を

したんだ」

雫にしては珍しいこともあるものだ。

その報酬について、少しかだけ気になったが、雇い主がいいといったのなら、多紀が口をはさむ理由などない。

「わかった、伝えておく」

「じゃあな、またいつか」

「うん。また、いつかね」

そう言って、笑顔で別れた。

いつか、なんていうのは、約束じゃない。あの時別れてしまった二人の道は、もう交わることはないのだ。

それでも、『いつか』という言葉には不思議な響きがある。

またどこかで巡り会えるのではないかという、そんな甘い夢を見ることも出来る。

その時は、今よりもつと言葉を交わし笑いあえることを願おう。

しばらくして、届いたのは、一枚の絵。

どうやら、金が足りないという男に、残りの報酬は多紀でも自分でも描いてくれればいいと、ふざけたことを雫が言ったらしい。

だが、よく見ないと、その絵に書かれている物体が、性別どころか、人物なのかどうかさえわからなかった。

「随分、斬新な絵だな」

雫が絵を見て唸っているが、それはたぶん上下逆さだ。そのことを指摘しようか多紀は悩んだが、元々、上下左右がよくわからない絵なので、指摘するのは止めた。

「昔から、彼の書く絵は、これでしたよ。でも、こういう絵が良いつて言う相手もいるらしいですから、世の中って本当にわからないです」

多紀にしてみれば、もうちょっとわかりやすいほうが、部屋に飾るにも人にあげるにもいいように思えるのだが、何故か新しいもの好

きな貴族や商人の間に、この手の絵が流行ってらしい。芸術方面に疎い多紀には、さっぱり良さがわからない。

「しかし、愛はあるんじゃないか？」

上下左右に何度もひっくり返しながらも絵を眺めていた雫が、そんな感想を口にした。

「どこにです」

「色遣いが、優しいじゃないか。森のようだよ」

言われて初めてそのことに気が付いた。

木々の緑、森に咲く花の色、湿った土。森で見かける色の全てが、その絵の中にあつた。

「でも、やっぱりもうちょっと美人に描いてもらいたかったです」

画面の中央で、向かい合っているらしい、目と口と鼻らしきものがやたらと大げさにかかれた、人だか植物だかわからない人物二人に、多紀は正直に本音を言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728z/>

魔女の小さな森

2011年12月5日19時48分発行